

琉球大学学術リポジトリ

南洋のネズミ事情

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 照章 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21031

をしなければならないことはあるが、その効果は自ら小範囲にとどまってしまう。

7)家ネズミと野ネズミの区別は判然としないので、公衆衛生を担当する厚生局（保健所）と作物保護を担当する経済局（地方庁経済課）が別々に対策をたてたのでは効果はあがらない。

8)ネズミの防除対策を立案するためには、当該ネズミに関する諸汎の調査資料を必要とする。

すなわちネズミの種類と習性、被害の実態を速に究明し、地域社会の規模においてそれに則した適切な総合計画を立てる。

9)ネズミの撲滅は綿密な計画のもとに組織的な継続的な徹底した作業を行うことによって可能である。

10)死ネズミはできるだけすみやかに処置する。

南洋のネズミ事情

南太平洋にはポリネシヤ、メラネシヤ、ミクロネシヤという非常に多くの島々からなる広大な地域がある。そこに生活する島民は主としてココヤシの果実ココナツを生産して彼らの主食とし、コブラ（種子の胚乳を乾燥したもの）を輸出することによって生計を立てている。ところが、この広大な地域にはナンヨウネズミ *Rattus exulans* やクマネズミ *R. rattus* がずっと以前から跳梁し、ココナツが未熟なうちに高いココヤシの幹の頂上に登り実を食害する。鼠は実の上端すなわち柄の付け根に近い部分をかじるために実はやがて落ちる。この産業的被害は著しい場合は40%以上に達する。害悪はそればかりでなく、さらに鼠は落果の胚乳を食害するので種子の硬い殻はお碗に早変りし、残存した胚乳汁は速やかに醗酵を完了してネッタインマカやポリネシヤシマカの産卵場を提供し、幼虫の生息場所となる。すなわち蚊の発生源となって糸状虫症（象皮病）やデング熱の蔓延を助長し衛生的害悪をもたらす。この産業的、衛生的害悪の根源である鼠をなんとかして駆除し、島民のために、より恵まれた南洋の楽園たらしめたいというのがWHO（国際保健機構）の念願であり夢でもある。

昨春、WHOの環境生物部長レアード博士が害虫の天敵研究の世界的権威九大農学部安松京三教授を訪れ、この問題を提起された。安松教授は不肖私をWHOのコンサルタントとして推薦され、今回南洋の鼠を調査する機会をもつことが出来た。

鼠駆除の3原則として環境的駆除（発生源の抑圧）、化学的機械的駆除（殺鼠剤、捕鼠器の利用）、生物的駆除（天敵の利用）があげられる。鼠駆除にはこれらの方法を併用するのが最もすぐれた対策であるのはもちろんであるが、対象地の環境（立地条件、産業形態、文明の程度など）いかんによって、どの方法を主体にするか、現実に即した実施可能な方法で駆除の目的を達しなければならない。広大な地域に散在するジャングルの性格を有する多くの未開な島々への防鼠対策として、まず天敵の利用がクローズアップされた次第である。

レ博士は上述の目的を強調され、天敵としてまず南洋の若干の島々に第2次大戦以前に日本人によって導入されたというオオトカゲをマークされた。

レ博士によるオオトカゲの多い島では鼠が少なく、オオトカゲのいない島では鼠が多いという情報があるので、この両者の因果関係を現地で実際に調査し、オオトカゲの天敵としての価値評価をまず行なってきてほしいということであった。

主たる調査方法は1)単位面積（ヘクタール）当りの鼠の生息数を算定し、これにオオトカゲの多寡との相関を求める。2)つぎにオオトカゲを捕獲して胃の内容物を調べ鼠を実際に食っているかどうかを直接に確かめる。3)さらにオオトカゲを飼育して生きた鼠を与えその捕食行動を観察する。の3点に要約できる。

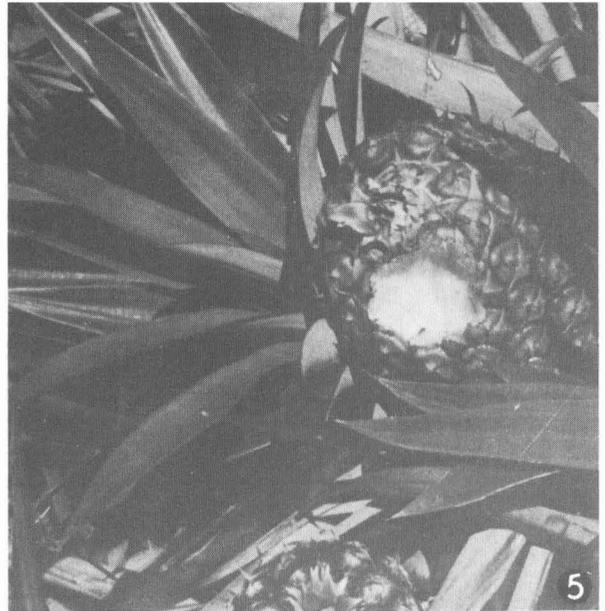
調査結果は1)オオトカゲは鼠駆除の天敵とし

て確かに有効に働き、オオトカゲ移入後の鼠の数は少なくとも半減はしていると思われるが、今なおヘクタール当り約200匹の鼠が残存している。これ以上の密度低減の効果をオオトカゲに期待することはできない。2) オオトカゲ数匹の胃内容物を検したが、鼠を食っていたものは1例にすぎず、他はカニ類、小形トカゲ類を多く食していた。鼠の成体を直接に捕食する場合は比較的少ないが、鼠の巣をほりおこして幼獣を捕食し、鼠個体群への強い圧力となっている効果は見逃さない。3) 捕食行動もあまりすばしこくなく、蛇のそれに似ており、1匹の鼠を呑みこめば3~4日間は摂食活動がにぶい。これらの結果からオオトカゲは鼠駆除の天敵として有効ではあるが、その効果にはおのずと限度があり、イタチの効果に比すればかなり劣ることが知らされた。ただ南洋では一般的に鼠の生息密度が異常に高いようなので、不十分ではあるが約200匹の密度に下げることにも大きな意義はある。

数年前、宮崎県延岡市サギ島（約100ヘクタール）にドブネズミ禍（ヘクタール当り32匹）が発生し、コウライイタチ23匹（♀14、♂9）を放飼、急速に鼠禍を鎮圧したが、イタチの効果はその習性からみて絶大なものがある。沖縄地方で最近イタチの導入が真げんに考慮されていることは当を得た方策と思う。南洋の鼠退治にイタチ類の力をかりる日が来ないとも限らない。

私はこの目で南洋群島をみる事ができた。南洋の島民は日本人に対して非常な好感を抱いており、平和なイファルク島民は心からなる協力と歓待を惜しまなかった。それこそ私ただ1人、絶海の孤島で愉快的調査の日々をもち得たのも島民320人の支援と保護の賜物であった。南洋の島民の上に幸多かれと祈りつつ。

（九大・農動物学教室 農博 内田照章）



⑤ネズミによるパインの食害（大宜味村上原）

⑥ネズミによるイモ畑の被害状況（西表島上原）